

『続の原』論講 発句

二〇一四年（平成二六）九月二〇日の例会にて発表

担当 東洋大学大学院・金子はな

### ○春19番の発句

玉鉾の袂にふるふつばめ哉

調柳

〈作者〉

作者の調柳は既出。春6番を参照のこと。

〈語注〉

- ・「つばめ」によって、春。燕については春16番の語注参照。早く『古今和歌六帖』に題として挙げられるが、和歌での用例は少なく、俳諧以降に愛された季題。
- ・玉鉾 「道」「里」などにかかる枕詞。「玉鉾の袂」は、「玉鉾」がかかる「道」の語を省略し、そこを行きかう人々の着物の袖を導いたものか。和歌ではしばしば「夕露にひもとく花はたまほこのたよりに見えし縁にこそありけれ」（『源氏物語』夕顔の巻）、「たまほこのゆくてにかかるやまざくらわれひとりやはをらすぐべき」（『千五百番歌合』丹後）など、「玉鉾」が「道」の縁で他の語にかかることがある。あるいは「このほどは知るも知らぬもたまほこの行きかふ袖は花の香ぞする」（『新古今和歌集』藤原家隆）によるか。「花」を「燕」に、「袖」を「袂」に翻案したところが俳諧的。
- ・ふるふ 振り動かす。ゆり動かす。以下の例と同様、鳥が羽を震わせる様子と思われる。

うぐひすや羽の露ふるふ花の中 細石（『国の花』宝永二年）

朝霧あさぎりに鳥の羽ふるふ木間哉 南岡（『たびしうい』寛政七年）

〈句解〉

「（玉鉾の）道を行き交う人々の着物の袖に触れそうなほど低く飛んできて、その袂に親しく近づいて翼をふるわせている燕であるよ。」

春16番から引き続き、人に親しむ燕の様子が詠まれている。18番までは屋内のイメージが強いが、この句から野外に転じる。

### ○春20番の発句

雨の日や野馬とあそぶむら燕

扇雪

〈作者〉

作者の扇雪は、生没年未詳。『続の原』では句合の部に三句、発句の部に五句入集、二歌仙に参加。このほか不卜編『丙寅之歳旦』、其角系俳書の『蛙合』『続虚栗』、調和系俳書の『ひとつ星』『俳諧葱摺』に各一句入集。『続虚栗』の句群から、貞享四年春に不卜と鹿島に詣でていることがわかり、「当時不卜に最も親しく、しかも超党派の」な俳人の一人とされる（宇都宮讓「『続の原』考」『連歌俳諧研究』八三号、一九九二年）。

〈語注〉

・「むら燕」によって、春。「燕」は春16番の語注参照。「むら」は同類のものが一団となっていて、またそのもの。燕は越冬する種を除けば群れをなさないので、数羽ほどが同じ場所で土を集めたりしている様子と思われる。和歌に用例はなく、俳諧でも左の掲出句が早い例である。

むらつばめ柳におつる柱コトナかな

四友（『虚栗』天和三年）

杯さかづきに泥な落しそむら燕

芭蕉（『笈日記』元禄八年）

・野馬 野飼いの馬。放牧の馬。馬と燕の組み合わせは和歌にはみられない。俳諧では『類船集』に「駒―小鳥」の寄合がみえ、発句でも両者をよむ例がある。

行馬ゆくの下腹くぐるつばめかな

文始（『葱摺』元禄二年）

はね馬にさはつて見たる燕哉

菱花（『国の花』宝永二年）

〈句解〉

「春雨の降り注ぐ野原で、燕の群れが馬のまわりを飛び回って遊んでいる。」

雨が降ると土が軟らかくなるので、巣作りのために野において土を集める燕を「馬と遊ぶ」と捉えたものか。19番と同様、野外で低く飛び回る燕をよむが、燕と組み合わせられる対象は人から動物へと転換している。

○春21番の発句

雨だれのいとまをくぐるつばめ哉 重元

〈作者〉

作者の重元は、生没年・経歴・門流等未詳。『俳文学大辞典』『俳諧大辞典』『元禄時代俳人大観』に該当する俳号なし。『鷹筑波』（寛永一九年）に「重元」、『時勢粧いましやうすがた』（寛文一二年）に「山井重元（陸奥岩城住）」の名が見えるが、関連性は不明。

〈語注〉

- ・「つばめ」によって、春。春16番の語注参照。
- ・雨だれ 軒からしたり落ちる雨のしずく。
- ・いとま 絶え間。すきま。漢詩・和歌には「密雨如散糸みつうさんじゆのことし」（張景陽「雜詩十首」、『文選』所収）「龍田川錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして」（『古今和歌集』詠人知らず）など、降雨の様子を糸に例えたものがみられる。「雨だれのいとま」は、普通に通に考えれば雨滴の落ちる暇であるが、右の文学伝統を考慮すれば「糸間」とかけたものともとれる。
- ・くぐる 狭いすきまを通りぬける。

〈句解〉

「糸のように落ちる雨滴のすきまを器用にすりぬけて、家々の軒を燕が出入りしている。」  
20番に続き、雨の中を飛ぶ燕をよむ。実景としては巣作りに励む燕の様子であろうが、

それを「いとまをぐる」と美的かつ活動的に捉えたところが一句の眼目と思われる。16番から当句まで、人や動物、春雨に親しみながら営巣する燕の様子。

### ○春22番の発句

下葉くをやしなひにせん雨の蝶 拳白

#### 〈作者〉

作者の拳白は既出。春9番を参照のこと。

#### 〈語注〉

・「蝶」によって、春。冬期を除いてほぼ年中見られるが、ふつう春の季題とされる。また『莊子』の「胡蝶の夢」の逸話は著名で、『山の井』（正保四年）や『滑稽雑談』（正徳三年）にも紹介されている。当該句にみえる雨と蝶は、以下の例のように「雨を侘びる蝶」としてよまれることが多い。

掛菜春めく打豆の汁

芭蕉

細なる雨にもしほる蝶のはね 利合（『深川』元禄七年）

てふくくの雨を侘行軒の雨 貝錦（『俳諧新選』安永二年）

・下葉 下の方の葉。「下葉くを」は雨の届かない下葉から下葉へと伝って、の意か。  
・やしなひ 生き長らえるようにすること。活力を保たせること。

#### 〈句解〉

「木々や草の下葉から下葉へと移って、羽を休めるところとしよう。雨に降られる蝶よ。」

21番から続いて雨中の景である。当該句で季題は燕から蝶へ転換する。

### ○春23番の発句

あるほどの蝶の数見る颯かな 一桃

#### 〈作者〉

作者の一桃は未詳。『続の原』句合の部に四句、発句の部に六句入集、二歌仙に参加している。このほか『俳諧葱摺』に五句が入集していることから、調和系俳人と考えられる。

#### 〈語注〉

・「蝶」によって、春。  
・ほど 力や量などの極限。限り。  
・数見る 「数見ゆ」と同義か。「数えることができる、数えられる」の意。『古今和歌集』の用例「白雲にはねうちかはし飛ぶかりのかずさへみゆる秋の夜の月」（読人知らず）では、「空高く飛ぶ雁の数さえも数えられるほどにはつきりと見える」とよむことで秋月の明るさを強調する。当句では、野原の草などにとまっていた蝶が、突風によつ

て空へと吹き上げられている様子を「数見る」と表したものであろう。蝶の数の多さ、突風の強さを感じさせる表現である。

・颺 ぐるぐる廻って吹く風。旋風。蝶と風の取り合わせは、和歌では「わづかなる春の胡蝶の羽風にも匂をちらす花ぞのの梅」（正徹『草根集』）のように、蝶の羽が起こす風に注目するものが多い。一方俳諧では「花にきて吹もどされつ風の蝶」（ゆん『曠野後集』）のように、風が蝶の飛行を妨げる様子をよむものと、「蝶軽し風のちからに乗る心」（露白『渭江話』）のように、蝶が風に乗る姿を捉えたものがあり、当該句は後者に属する。なお、中国の類書『太平広記』（九七八年成立）に、南孝廉なる人物が作った繪が蝶に変じ、暴風に乗って一斉に飛び去ったという奇談がみえる（この話は『類船集』の「胡蝶」の項にも紹介されている）。

#### 〈句解〉

「辺りにいる全ての蝶の数を数えられるほどに、一斉に舞い上がらせているつむじ風であるよ。」

突風でたくさんの蝶が一気に空に舞い上がった瞬間をとらえた句。22番から引き続き蝶の句であるが、情景は雨から風の中へと転じている。

#### ○春24番の発句

わが影に追つきかぬる胡蝶かな 不角

#### 〈作者〉

作者の不角は既出。春2番を参照のこと。

#### 〈語注〉

- ・「胡蝶」によって、春。
- ・影 物体が光を遮った結果、光と反対側にできるその物体の黒い影。ここでは飛んでいる蝶の影を指すと思われる。またことさらに「わが影」とことわっているのは、『莊子』の「胡蝶の夢」をふまえて、作者自らも蝶と化し、蝶の視点になって影を追っているという演出ととらえることも可能か。
- ・影法師と恋して遊ぶこてふかな 花屑『国の花』（宝永二）
- ・追つきかぬる 追いつくことができない。なかなか前進しない、一種もどかしいような蝶の飛び方が想起される。

#### 〈句解〉

「ひらひらと飛ぶ胡蝶に陽光が当たって、地面に影を落としている。蝶は羽ばたいて影に追いつこうとしているが、影はどこまでも先になり追いつくことができないでいる。」  
蝶が羽ばたいて不規則に飛ぶ様子を、自分の影を追っているところと捉えたもの。